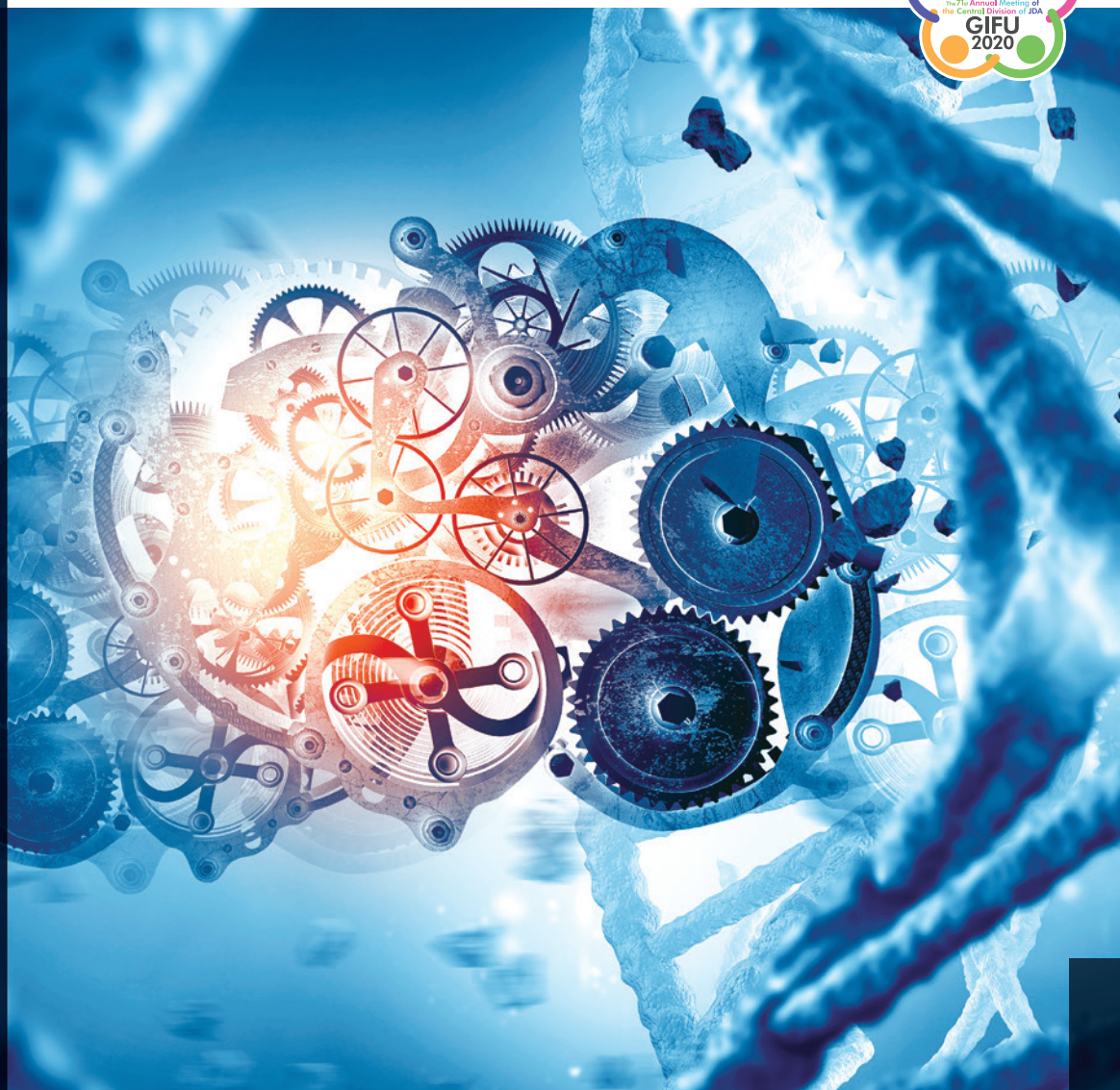


アトピー性皮膚炎における

痒みのメカニズムと 外用療法の重要性



2020年 **10月10日** [土] 15:25-16:25

WEB配信

※詳しくは学会ホームページを
ご確認ください

講演

1 アトピー性皮膚炎における痒みのメカニズム

座長

富山大学 学術研究部 医学系 皮膚科学 教授 **清水 忠道** 先生

演者

金城学院大学 薬学部薬学科 基礎医療薬学分野 病態薬理学研究室 教授 **安東 嗣修** 先生

講演

2 アトピー性皮膚炎:生物学的製剤時代における外用療法の役割

座長

旭川医科大学 皮膚科学講座 教授 **山本 明美** 先生

演者

九州大学大学院医学研究院 皮膚科 体表感知学講座 准教授 **中原 剛士** 先生

講演

1

アトピー性皮膚炎における痒みのメカニズム

金城学院大学 薬学部薬学科 基礎医療薬学分野 病態薬理学研究室 教授 **安東 嗣修** 先生

アトピー性皮膚炎は、激しい痒みを伴う慢性炎症性皮膚疾患である。アトピー性皮膚炎の痒みは、抗ヒスタミン薬だけではコントロールが難しく、このことは、ヒスタミン以外の痒み因子の関与を強く示唆する。近年、アトピー性皮膚炎の痒みに関して、動物を用いた痒み研究に加え、ヒトでの解析が盛んに行われてきており、表皮ケラチノサイトやT細胞、好酸球、好塩基球をはじめとする免疫系細胞の関与に加え、これらの細胞から遊離されるIL-31などのサイトカインやカリクレイン5などのプロテアーゼなど多くの新たな痒み因子が明らかにされてきている。最近では、皮膚のメルケル細胞が痒みの調節に寄与することも見出されてきた。痒みは、このような細胞や因子の関与だけでなく、皮膚自体の環境変化（pHの変化、バリア機能の低下、末梢神経の分布など）も重要である。本講演では、主に皮膚におけるアトピー性皮膚炎の痒みの発生メカニズムに関して概説する。

ご略歴

1999年 富山医科薬科大学大学院薬学研究科博士後期課程修了(博士(薬学))	2000年 富山医科薬科大学薬学部薬品作用学 助手
1999年 米国国立衛生研究所(NIH)、NIMH客員研究員(～2000年)	2005年 富山医科薬科大学薬学部薬品作用学 講師 (10月 国立3大学統合により富山大学に名称変更)
2000年 米国国立衛生研究所(NIH)、NHLBI特別研究員(～2001年)	2008年 富山大学大学院医学薬学研究部応用薬理学 准教授
兼、日本学術振興会海外特別研究員(～2001年)	2020年 金城学院大学薬学部薬学科基礎医療薬学分野病態薬理学 教授 現在に至る

講演

2

アトピー性皮膚炎：
生物学的製剤時代における外用療法の役割九州大学大学院医学研究院 皮膚科 体表感知学講座 准教授 **中原 剛士** 先生

アトピー性皮膚炎(AD)はかゆみを伴う湿疹が増悪・寛解を繰り返しながら慢性の経過をとる皮膚疾患であり、その病態は、皮膚バリア機能異常、アレルギー性炎症、かゆみ・搔破が複雑に絡み合って形成される。したがって、治療はその病態に基づいて、(1)炎症に対するステロイド外用薬やタクロリムス軟膏による抗炎症外用療法と、(2)皮膚の生理学的異常に対する保湿剤の外用やスキンケアを中心に、(3)悪化因子の検索と対策がその基本になる。近年AD治療における新薬開発は目覚ましく、すでに臨床の現場では抗IL-4受容体抗体(デュピルマブ)が使用されるようになり、素晴らしい効果をあげている。しかしそのような状況においても、ステロイド外用薬やタクロリムス軟膏による抗炎症外用療法はAD治療の基本となる。そこで本講演では、ADの病態を概説し、炎症を制御することの重要性とそのための適切な抗炎症外用療法について解説したい。特にタクロリムス軟膏の効果的な使い方や注目すべき作用機序、新規全身治療薬が次々登場する中での抗炎症外用薬の位置づけについても触れたいと思う。

ご略歴

1999年 九州大学医学部卒業 同大学皮膚科入局	2005年 同修了 米国スローンケタリング記念がんセンター留学
2000年 浜の町病院皮膚科	2008年 九州大学皮膚科 助教
2001年 九州医療センター皮膚科	2013年 (1月)九州大学皮膚科 講師 (4月)九州大学皮膚科・体表感知学講座 准教授 現在に至る
2002年 九州大学大学院医学研究院博士課程入学	